

其の四 追悼と甦生の地・高野山

弘法大師が千二百年前に開山した高野山、この真言密教の聖地に松下幸之助が残した足跡とは……。

PHP総合研究所第一研究本部部长 佐藤悌二郎

初めて高野山に

大正十五年十月のある日、高野山に三十歳の青年実業家松下幸之助の姿があった。松下が、生まれてから九歳まで育った和歌山市から紀ノ川を東に四十キロほどつた上流にあるこの聖地を訪れたのは、そのときが初めてであった。以後、この地は松下にとってきわめて縁の深い場所になっていく。松下が初めて高野山に登ったのは、次のような経緯による。大正末期、松下電氣器具製作所（当時）にとって最も重要な取引先は、大阪の山本商店であった。その主人の山本

武信氏は根っからの大阪商人で、松下とは考え方の違いから対立する点多かったが、松下は、その信念にあふれた商売哲学に学ぶところがたいへん多かったという。山本商店とは、大正十二年に発売した砲弾型電池式自転車ランプの全国総代理店契約を結び、販売のすべてを任せていた。しかし、新たに開発・製作した角型ランプ（ナショナル・ランプ）の発売に際して、山本氏と松下の方針が一致せず、結局、大正十五年十月、松下は代償として山本商店に、当時としては大金の一万円を現金で支払って契約を解除することになった。厳しい折衝だったが、この間のやり取りを通じて松下の態度に好感をもった山本氏が、十月のある日、松

下を高野山に招待してくれたのである。

このときに有名な“運だめしの石”のエピソードが生まれる。小さな祠のなかに弘法大師が唐から持ち帰ったという“運だめしの石”が納められており、その石を棚に上げた人は運が強いという言い伝えがあった。そのとき同行した山本氏と山本商店の支配人がためしてみたが、二人とも上げることができない。ところが、三人のうちでいちばん力のなさそうな松下がやってみたところ、軽々と持ち上げられたのである。松下自身、その不思議さに驚くとともに、この瞬間、ナショナル・ランプは間違いなく成功するという信念が力強く湧いてきたという。

この祠と石は、今も当時の姿をとどめている（写真①）。奥の院燈籠堂に向かって左手すぐ前方の参道際にそれはある。しかし、“運だめしの石”という表示も、そのような言い

というのは、二人がやるのをみて、そのコツをつかんだのかもしれない。

物故者慰霊塔を建立

このときに高野山に参詣して以来、松下はときどきこの地を訪れるようになった。それはほとんどが旧主である五代五兵衛翁（六代目。松下が満十歳から十五歳まで奉公した五代自転車の店主五代音吉氏が昭和三年に六代目五代五兵衛を襲名していた）に誘われてのものであった。

松下はいつごろから五兵衛翁と高野山に登るようになったのだろうか。今日、大阪から高野山へは電車とケーブルカーを利用して、山頂まで二時間ほどで行けるようになったが、松下が五兵衛翁と一緒に参詣するようになったころは、ケーブルはまだ敷設されておらず、また電車も麓のはるか下の方までしかなく、山へは徒歩か駕籠で行くよりほかなかったという。ケーブルができたのは昭和六年のことだということなので、少なくともそれ以前から松下は五兵衛翁と一緒に高野山に登っていたと思われる。そしていつしか松下は、この霊域に心惹かれるようになり、いつかこの地に、不幸にして事故や病氣などで亡くなった物故従業員の慰霊塔と先祖の墓碑を建てたいと考えるようになった。

そんな折も折、昭和十一年春、松下は五兵衛翁に誘われて高野山に参詣した。そのとき、五兵衛翁から墓所建立をすめられたのである。松下がかねてからの思いを話すと、五兵



写真①
運だめしの石を納めた祠

伝えの説明書きもないため、知らない人は見過ごしてしまいがちになる。なかの石は砲丸のような丸い形ではなく、むしろ平べったい。石は相当に重く、持ち上げるにはちょっとしたコツがいる。松下が一度で持ち上げた

写真③
五代家墓碑開眼法要にて（昭和8年頃）
（前から3列目左端松下幸之助、むめの夫人の顔もみえる） 提供：西禅院



写真②
松下電器物故者慰霊塔前にて
（むめの夫人、松下電器関係者と）
提供：西禅院



衛翁は喜び、みずから墓地を物色し、奥の院参道、中の橋に近い場所を選んでくれた。その場所は、五代家墓所の斜め向かいであった。

同年六月、幸之助・むめの夫婦と松下電器婦人会（「みどり会」といい、従来の店員夫人会を会員組織に改組、昭和十一年四月に結成された。会長はむめの夫人）の会員百二十名あまりが参加して、慰霊塔の起工供養が行われた。それから二年ほど経った昭和十三年五月九日、慰霊塔が竣工し（写真②）、彼岸の入り九月二十一日を選んで、遺族六十五名、会社代表六十五名、計百三十名が列席して、西禅院院主導師のもと、高野山二十五力寺の高僧によって、慰霊塔の開眼法要が営まれた。そのときの様子を、当日出席していた後藤清一氏（三洋電機元副社長）は著書『叱り叱られの記』のなかで、次のように描いている。

「（また泣きはるぞ。そう思いながら、われわれももらい泣きしている。人生、意気に感ず。戦雲暗い昭和十三年、高

野山の西禅院で第一回物故従業員慰霊法要を挙行。企業の行事としても、異例のことではなかったか。

『松下が今日あるは、あなたがたの尽力にあずかるところまことに大きい。しかるに、この松下の繁栄を物故社員の一入ひとりにもてもらえないのは残念でならない』。

席上、大将（松下幸之助のこと＝筆者）は物故者の名を逐一読みあげる。相当な数であった。そして、挨拶なかばにして、すすりあげ、絶句し、ついに号泣される。もともと大将はよう泣いた。ジメジメするのではなく、人生はこれやなかったらあかんと感ずることがあると一人で泣けてこられるらしい。その姿は、見る者をしてまた深く心をうたしめるものがあつた。

それはともかく、ある意味では松下は集まることが好きであつた。なんぞあると集会を持つ。そして、十分に説明し、また社員の所感発表をうける。満場が熱気に燃える。そのくしかえしのうちに、いつのまにか大将のレールのうえにのせられている。たとえば、これなどもその一例ではないか」

このとき以来、松下電器では毎年九月、秋の彼岸のうちの一日を選んで、高野山西禅院本堂において過去一年間の物故従業員の合祀祭と慰霊法要を行うようになった。

なお、今日、高野山には、多くの企業の墓碑が立ち並び、しかもその数は年々増えているという。しかし、後藤氏も書いているように、企業がこのような行事を行うのは当時としては異例のことだったようで、まさに松下電器がその嚆矢（こうし）となったといってもあながち間違いではないようである。

西禅院との縁

ところで、ここに登場する西禅院。これは、現在百二十あまりある高野山の寺院（うち宿坊寺院約五十力寺）のなかでも別格本山に位置する有力な宿坊の一つである。当院住職後藤昌大氏の話によれば、ここを菩提寺としている企業も多く、大きなところでは、松下のほか住友、キッコーマンなどがそうだという。

では、数ある寺院のなかで、なぜ西禅院が松下の菩提寺（ぼだい）になったのか。後藤住職によれば、それは五代家との関係だという。「当時はまだクーラーもない時代で、ちよつとした人はみな、夏に高野山に避暑に来て、ひと月かふた月滞在された。五代さんもそれで来られたと聞いています。松下さんがいつつてこられたのか、そのへんはちよつとわかりませんが、まあとにかく五代さんと一緒に来られたのが始まりではないかと思ひます」

もつとも、五代家がなぜ西禅院と縁ができたのかということについてはよくわからないという。

ただ、西禅院の古いアルバムに、五代家の墓碑の開眼時の写真が残されている（写真③）。そこには幸之助・むめの夫婦の姿もみえるが、その添え書きに昭和八年ごろとあり、そのころ故五代五兵衛の墓碑の開眼供養が営まれたようである。もちろん五代家が西禅院と関係ができたのは、そのもつと前のことだと考えられるが、いずれにせよ、そのようなこ

写真④
西禅院にある石灯籠前にて
(左から2人目より五代ふじ夫人、加藤大観氏、むめの夫人、五代五兵衛氏、松下幸之助、西禅院住職後藤義広氏〈当時〉)
提供：西禅院



とがあって、六代目五兵衛翁は、自分と同じように松下にも墓所の建立をすすめたものと思われる。

なお、ここにもう一枚、珍しい写真がある(写真④)。これは西禅院の山門に向かって左手にある石燈籠をバックに写したもので、石燈籠には連名で「大阪 松下幸之助 五代五兵衛」とあり、両名で贈ったものであることがわかる。

ここに写っている人物は、現西禅院住職後藤昌大氏の父君の先代ご住職後藤義広氏と、幸之助・むめの夫婦、五代五兵衛・ふじ夫婦、それと加藤大観氏他一名である。

加藤大観氏は、真言宗のお坊さんで、松下とは、さきにあがた山本商店の顧問をしているときに知り合った。その後縁あって、昭和十二年から松下のそばで起居するようになり、昭和二十七年に八十一歳で亡くなるまで、松下の相談相手をつとめつつ、松下の健康と長寿、また松下電器社員員の安全息災を祈って、朝夕二時間の勤行を一日も欠かさず行なった人である。

この写真がとくに珍しいのは、ふじ夫人(左から二人目)が写っていることである。ふじ夫人は、松下の現存する最も古い写真で、十歳のころに撮ったものとしてよく知られた写真と一緒に写っている方である。

この写真はおそらく、石燈籠を献じたときか、その直後に記念に写されたもので、物故従業員の慰霊塔と先祖の墓碑が竣工し、開眼法要が営まれた昭和十三年に近い時期のものだと思われるが、石燈籠は今も当時と同じ場所に立っている。

以後、この西禅院を菩提寺として、毎年、物故従業員の合

祀祭と慰霊法要をその本堂で行うようになった。

その本堂の見事さ、美しさはとても言葉では言い表せない。一歩足を踏み入れると、そこには数え切れないほどの釣燈籠が天井から幾列も並んで吊り下がり、その下に小さまざまな厨子が、これまた幾段、幾重と重なるように並んでいる。その情景には、思わず息を飲み、眩暈^{めまい}すら覚える。さらに感動的なのは、松下家の厨子である。それは他のものに比べて決して大きくはなく、しかも隣りにある五代家のそれよりもひと回り小さいのである。そこには松下の旧主五代家に対する思いが偲ばれ、いかにも松下らしい情趣が感じられる。

この本堂で行われる法事には、松下もほとんど毎年来ていたという。ただ、松下電器の社内誌『松風』昭和三十一年七月号に、「近年私はいろいろの都合で代参ですますことが多くなり」とあるので、そのころは法事にあまり来ることができなかったようである。

もっとも、後藤住職によれば、法事以外でも、西禅院を松下はよく訪れたという。戦前、松下と松下電器の幹部だけ、四、五人が寄って会合をもったりしたこともあったし、戦争が終わってまだ間のないときに、一人でブラッとやってきて、一泊して帰っていったこともあったそうである。

この西禅院では、PHP研究所創設三十周年記念出版として企画された松下の著書『私の夢・日本の夢 21世紀の日本』を制作するための合宿も行われている。合宿は昭和五十一年七月十五日から二十七日まで二週間近くに及び、その間

松下も十六日から二十七日まで西禅院に起居し、PHP研究所の研究員とともに、終日、研究・検討に没頭した。

茶室や講堂を寄贈

西禅院以外でも、高野山では、さまざまところと松下は縁がある。たとえば、高野山真言宗の総本山であり、全国四千に及ぶ末寺の宗務を執っている金剛峯寺。ここには歴史的に有名な絵師による豪華な 絵で飾られた部屋や、豊臣秀吉の養子で、関白になったものの、秀頼の出生後、秀吉と不和となつて高野山に幽閉されて自害を命じられた秀次切腹の間などがある。しかし茶室がなかったため、松下は個人で茶室を寄贈している。

また、「松下講堂」を高野山大学に贈ったり、献燈碑も志納している。参道にあるその献燈碑には、細長い石に「献燈」と大きく彫っており、その下に「大阪市此花区大開町二丁目 松下幸之助」と小さく彫られている。

もっとも、その献燈碑をみつけたある人が写真を撮って送ってくれるまで、松下はそれをすっかり忘れていた。献燈碑を志納したのは大開町時代(大正七年三月〜昭和八年七月)のようだが、その正確な時日ははっきりしない。松下によれば、「おそらくそれは、五代さんに誘われてときどきお参りしたことがあって、そのころたしか献燈運動というか、何かそういうすめがしきりに行われたことがあったので、そのときに献燈したものと思われる。そして、それまでは高野山

にこれといった深い縁もなく、とくに信仰心が厚かったわけでもなかったで、この献燈もそれほど深い気持ちで行なったものではなかっただろう」ということである。

しかし松下は、その後しばしばこの霊場に登り、いつしかこの霊域に惹かれるようになって、この地に物故従業員慰霊塔と先祖の墓碑を建てたいと考えるようになったのである。

では具体的に、高野山に参るなかで、どのようなことを松下は考えたり感じたりしたのか、それを幾つか紹介しよう。

高野山での感懐

奥の院の御にお参りをしたときのことである。一の橋から奥の院まで十八丁あるというその参道の両側は墓所になっていて、何万と数えるほどの大小さまざまな墓が立ち並んでいる。そのなかに、とりわけ立派な墓がいくつかあった。それらは、おおむね昔の大名の墓だが、必ずしも全部が全部手入れが行き届いているわけではない。聞けば、無縁仏になっているものも少なくないという。大名といえば、明治維新のときに華族に列せられ、爵位が与えられた。そして、世襲財産も定められ、先祖の祭事を絶やさぬように、法律でも保護されていたという。にもかかわらず、わずか数十年の間に家が断絶してしまい、先祖の墓も年に一度でも、二年に一度でも、お参りすることができないとか、あるいは全然音沙汰がないということもあるという。

これに松下は驚き、やはり、世の中は物だけではない。

ように思えてしかたがない。日本人の一人として、あるいは人間として、いま一度静かに考えてみたい。そして精神面の高揚に努めたい。島津公の建てた供養塔をみて、そう松下は考えたという。

また、松下は開創の弘法大師の事蹟を聞いたりしているうちに何かと教えられることが多かったという。たとえばその一つは、信念は偉大なことをなし遂げることである。

高野山は、今でこそ自動車道路も、電車もケーブルもできて、ある程度便利といえれば便利だが、弘法大師が高野山を開いた千二百年前は、どれほど不便なところであったかしかない。松下は、弘法大師が、深山幽谷などという言葉だけではとても足りないほどの大山奥に、もちろん人跡もまったくなかったであろう都から遠く離れたこの辺地へよくも来られたものだ。しかも大師はここを霊地と定められ、雄渾な構想をもって寺院の建設を始めたのであるからまったく感嘆のほかない。と感服し、どうしてああいふ辺鄙なところに広大な道場をおつくりになったのか。その心持ちはよくわからないが、しかし、よくもやられたものだ、よほどの信念というか、大きな決意をもっておられたにちがいない。と思った。

そして、「われわれはどうてい弘法大師の真似事もできないが、その信念の何十分の一、何百分の一、何万分の一でももてば、そこにある一つの境地をひらくことができるのではないか。高野山へ参って、非常に教えられたのはそのことだ。やはり人の心、一念、信念というものは偉大なことをなし遂げる。こういうことを痛切に感じて、自分も自分の分に

いくら地位や財産があっても、いつまでもつづくものではない」と思った。そして、では、永遠に消えないものは何か。それはその人の精神ではないか。たとえその人の肉体は死んでも、末代まで残って変わらないものはその人の心であり、思想であり、その人がこの世において果たした業績ではないか」と、しみじみ考えさせられたという。

また、朝鮮の役のときに島津義弘公が建てた供養塔があった。島津公は秀吉の命を受けて朝鮮へ行き、明軍を撃破して帰還したのち、高野山にその戦没者の霊を祀る墓を建てたのである。それも自軍の戦没者ばかりでなく、敵の戦没者の霊も同時に慰めるために建てたという。その島津公の人間味あふれる処置、立派な心意気に松下は感服し、四百年前といえば、今日よりだいぶ野蛮なところがあったと思う。にもかかわらず、そういう思いやりというか、人情に厚い面がみられる。われわれ日本民族の血には、そういう人情に厚い、人間愛に深いものがあるのではないか」と思った。

そして、今日は、それから四百年を経て、文明文化の世になった。とくに物質面では非常な進歩を遂げている。しかし、人間生活は、物質面だけで支えられているのではない。もう一本、精神面の柱が必要である。お互いの生活は、物心両面の二本の柱によって支えられているのだ。科学の進歩を人間の生活に実際に生かしてゆく精神的な柱が、並行して養われなければならない。そこに初めて人間の幸せが約束されるのではないか。ところが、今日のわが国の世相をみると、科学の進歩に眩惑されて、心の培養がおろそかにされている

応じた一念、信念をもたなければいけないと感じた」といつている。

さらに松下は、「大師の事蹟を聞き、またその広大な墓所を訪ねていくうちに、その気宇壮大で、しかも細密な計画ぶりにしみじみ頭が下り、会社の経営もかくあるべしといった深い感動に打たれた。弘法大師は、信仰の面ではもちろん不世出の人であったが、経営者としても非常に雄大な偉大な人であったと思う」と語り、この点、何度も自分の身を反省したという。

このようにみえてくると、松下が高野山をしばしば訪れたのは、松下にとってここが、物故従業員や先祖を慰霊する追悼の地であるとともに、大師の偉業、精神にふれることでみずからの心を鼓舞し、その清爽の氣に包まれることで心を洗い、精気を養う甦生の地としての役割を果たしていたからである。

今、松下の魂は、聖地高野山で、亡くなった従業員や父母兄弟と語らい、弘法大師と同行二人、高野を巡って、清新の氣を漲らせているのだろうか。



さとう・ていじろう

昭和三十一年新潟県生まれ 五十五年 慶應義塾大学文学部卒業後、PHP総合研究所入所。研究員としてPHP理念および創設者松下幸之助の経営観の研究に従事、『松下幸之助発言集』全四五巻をはじめ松下幸之助に関する多数の書籍・テープ集等の原稿執筆、編集、制作にあたる。現在、第一研究本部松下理念研究部長、研究事業部部长、松下社会科学振興財団主任研究員を兼務。著書に『松下幸之助の軌跡』『経営の知恵・トップの戦略』『名経営者に学ぶ商道 実践コース』（いずれもPHP研究所）などがある。